

府中市史編さんだより

第5号 平成30年(2018)3月27日



空からみた人見付近

ふちゅう温故知新④

人見 (ひとみ)

人見村

旧人見村は人見街道に沿った集落で、現在の若松町3・4丁目、浅間町4丁目、多磨町、紅葉丘付近にあたります。府中市域の旧村の多くが多摩川低地に広がっているのに対して人見村は台地上に開けていました。

戦国時代の古い帳面を後の時代の人々が写した史料からは、天正年間(1580年頃)に百姓19人(戸数16軒)が居住し、畑を耕作したことがわかります(河内武家文書「人見之郷百姓前寄帳」)。明治5年(1872)の戸数は53軒に増え、麦類や豆類など雑穀のほか、蕎麦、里芋、薩摩芋、桑、繭、酒などさまざまな産物がありました(河内辰夫家文書「人見村明細書上帳」)。

村名の由来

人見という村名は、南北朝時代に武蔵七党の猪俣党の人見氏一族がこの地に居住したという伝承に由来しています。現在、浅間山の山中には「人見四郎の墓跡」と刻まれた碑がありますが、現存する史料が少ないため人見氏との関係について確実な証拠はありません。

埼玉県日高市の町田家文書の史料に、観応3・正平7年(1352)の人見原での合戦が登場します。この合戦は足利尊氏と新田義貞の

子の義興、義宗兄弟が戦った人見原合戦(武蔵野合戦)のことです。合戦が繰り広げられたと思われる場所は、現在「人見原古戦場」として東京都の旧跡に指定されています。

また、現在は廃寺となっている天台宗幸福寺の観音堂にあった鱈口の銘文に、「武州多東郡府中人見郷観音堂 天正八年卯月十八日再建」とあるので、少なくとも天正8年(1580)には人見という地名で呼ばれていたのは確かでしょう。

浅間山

人見集落の北側には現在都立浅間山公園になっている標高約80mの浅間山があります。江戸時代の地誌『武蔵名勝図会』では浅間神社のある最も高い山を浅間山と表記しています。同じく江戸時代に成立した『新編武蔵風土記稿』では3つの山をそれぞれ堂山・中山・前山と呼んでいます。他の地誌には人見山、人見塚、大山などの呼称も見られます。

浅間山の北側中腹には、現在も「おみたらし」と呼ばれる湧水がみられます。人見村は水の乏しい台地の上でありながら古くから集落が開けたのは浅間山付近の湧水のおかげかもしれません。

市史編さん担当では、人見の旧家で保管されていた資料調査も行っています。

「市民の歴史意識を育む市史を目指して」

近・現代専門部会長・元専修大学文学部教授

新井勝紘先生

このコーナーでは、市史編さん専門部会の部会長の先生にインタビューをしています。

今回は、近・現代専門部会の新井勝紘先生から、お話を伺いました。

資料との運命的な出会いから研究の道へ

事務局：はじめに研究の世界へと進まれたきっかけについて教えてください。

新井：私が研究の道に進んだ原点は、東京経済大学の色川大吉先生に指導を受けたことと、そのもとで五日市憲法という資料に出会えたことです。今年が明治150年となりますが、私が大学4年の頃は明治100年にあたる昭和43年(1968)で、日本の近代の一世紀をどう考えるかが避けられないテーマでした。そういった中で、8月に色川ゼミで五日市の深澤家の土蔵を調査することとなり、私も参加いたしました。その時に偶然にも私が手にした資料の中に五日市憲法があり、それが卒業論文のテーマとなりました。それ以来ずっと五日市憲法は私の研究活動の中で大きな柱となっており、近々その集大成を新書という形ではありますが刊行する予定です。

大学卒業後は、市制十周年を記念してはじめた町田市の市史編さんの担当職員として採用されました。それ以来、町田市では22年間にわたって勤め、その間に自由民権資料館の立ち上げにも関わりました。

視点とテーマが広がった歴博時代

事務局：その後、国立歴史民俗博物館(以下歴博)に移られましたが、その頃のことを教えてください。

新井：昭和56年(1981)に自由民権運動100周年のイベントがありました。その時に、多摩地域だけに限らない全国的な自由民権研究者のネットワークにつながる事が出来たのですが、そこで知り合った歴博の教授から、歴博で近代の常設展示に取り組むこととなったが、担当する助教授が退任してしまったので、その後任にという話が飛び込んできました。

た。かなり悩んだのですが、思い切って転身することにしました。

歴博で勤務することになって、それまで多摩地域といった一つの狭い地域から見ていたところから、北海道から沖縄、さらには海外と一気に歴史を見るための視野が広がったのが私にとっては大きな経験でした。それにもなって、研究テーマも随分と幅広いものとなりました。戦争について取り組むようになったのも歴博に行ってからですね。

事務局：新井先生は昨年8月に府中市の平和のつどいの講演で軍事郵便について講演していただきましたが、軍事郵便について調べ始めたのも歴博時代とうかがっております。そのことについても教えてください。

新井：私の性格もあると思いますが、人があまり手を付けていなかったり、やっけていてもまだ幅広く出来そうな分野に取り組んでみたいというところがありますね。軍事郵便も当初は資料としての価値はあまり認められていなかったわけですが、実際に読んでみると兵士やそれに関わる人々の心のうちなどが見えてくる貴重な資料なのだというのが分かってきました。

歴博で11年勤めた後、専修大学に近現代を担当する教員の後任として移ることとなりました。専修大学の近現代の教員は一人しかいないので、現代に近い時代にいたるまで何でも取り組まなければならない、歴博時代に引き続いてさらに視野やテーマが広がりましたね。専修大学では定年まで14年間勤めました。

府中にとっての近現代とは

事務局：半世紀にわたる研究活動のなかで、新井先生の中で変化があったのがよくわかりました。その中で、新井先生から見た「近現代の府中」はどのような特徴やイメージがありますか。

新井：府中に限らず多摩という地域の近現代には共通しているところが多いですね。明治26年(1893)までは神奈川県に所属していま

したし、東京の都心とはまた違った歴史を持った地域だと思えます。開港した横浜から新しい文化をいち早く取り入れたのも多摩地域の大きな特徴です。一方で、東京府や後の東京都から見れば多摩地域はどういった場所として見られていたのかというと、府下や都下といったような言葉に見られるように、どこか従属的な存在とされていました。三多摩格差という言葉もありましたが、いかにその状況を乗り越えようとしてきたのかが多摩地域の歴史を描くにあたっては課題となります。

また、これは多摩地域に限らず、東京都に接する県にも関係することですが、東京の急速な膨張にともなって、それぞれの地域のもつ役割は変わっていています。特に、多摩は首都・東京に包摂されている地域ですので、きっちりとそのあたりを把握していく必要があります。現在の府中や多摩地域をとらえていくうえでも、そんな時期に来ていると思えますね。例えば、水道や道路、ごみや環境などの問題はともひとつの都市や自治体だけでは解決できないものとなっていますし、都市間での競争というものもあります。これら様々な問題の中で、府中はどういった立ち位置にあって、どういった役割を果たしていかなければならないのかが問われてきていると思えます。そのためには、やはり府中だけで完結するのではなく、エリアを超えた幅広い視点や発想が必要になってくるでしょう。現代にも続く問題がどこから来ているのか、解決まではいなくてもそのきっかけにつながるような、近現代編としていきたいですね。

事務局：確かに近現代史は現在に直結していくところが多いですからね。幅広い視野が必要になってきます。

新井：人々のつながりという面でも、例えば大國魂神社の講中を見ると、非常に幅広い地域が関わっているのが分かります。どのテーマをとっても、府中市という限られたエリアだけで考えられるものではないということ意識して取り組んでいかなければなりません。

市史編さんの目的

事務局：新井先生は、これまでに多くの市史の編さんに関わり、その期間も約半世紀近くにおよびますが、その間にどのような変化がありま



したか。

新井：事務局と編さん委員と両方の立場を経験できたのはとても大きいですね。これまで様々な自治体史に関わってきておられますが、昔と今とでは自治体史を編さんする目的がかなり変わりました。

最初に私の関わった町田市史もそうですが、かつては市の歴史についての本がないので、とにかく作るということが大きな目的だったと思います。しかし、今は市民にとって自分たちの足元の歴史はどういったものなのだろうというところからスタートしています。今回の府中市史でも市民の目線で、市民のための歴史を、市民と協働して作っていくことを基本方針でうたっていますね。近年はどの自治体史でも、市民とともに編さんをすすめる姿勢が共通しており、その実現に向けてよりよい方法を模索しています。今は自治体史にとって過渡期にあると思えます。府中市史でも、市民にとっての歴史という視点にたえず立ち返って進めていくことが大事だと思いますね。

また、近年は人々の歴史意識といいますが、例えば府中が育んできた歴史や文化というものと、実際に住んだり学んだり働いたりしている人のつながりが薄くなっている時代になってきていると思えます。そういう時代に、自分たちの足元の歴史が、いかに今日の生活と結びついているのかを理解してもらえよう市史を目標にしていかなければと思います。市民の歴史意識にどう働きかけ、どうつながり、場合によっては既に市民が抱えている意識も変えていく。そういったところまで到達していけば、自治体史として理想的なものになるのではないかと思います。

事務局：市でも市への愛着を持ってもらうとい

部会通信

前号以降の、専門部会の活動について紹介します。

原始・古代専門部会

原始・古代専門部会は文献分野と考古分野の分野会を設けて「資料編」の作成を進めています。

文献分野会は、「資料編」の編集作業を行っています。古代の神話伝承や出土した遺物に書かれた資料、文学作品などの史資料を収集して、綱文（要約文）・読み下し文・解説を作成しています。分野会7回開催。

考古分野会は、府中市遺跡調査会などによる1,700か所以上の発掘調査の成果をもとに市内の遺構や遺物を表現した地図を作成して、「資料編」に掲載する予定です。また、出土した遺物の実測図作成を進めています。



考古遺物の実測図作成作業

中世専門部会

中世部会では、「資料編」の編集作業を進めており、中世の府中に関する文献史料の内容、語句の説明、解説のつけ方を検討しています。考古資料についても、出土した遺物の実測図を作成して掲載する予定です。部会3回開催。

また、3月11日に第3回府中市史講演会「中世都市「府中」の力」を開催して、海老澤衷部会長と清水克行副部会長に講演していただきました。

近世専門部会

近世部会では、「資料編」の目次と内容について検討を進めています。前回の市史編さんの時には見つかっていなかった史料も用いて、府中の人びとの歴史がわかる「資料編」を目指し

ています。部会5回開催。

また、昨年の12月16日に第2回府中市史講演会・パネル展示「史料でみる近世府中宿の歴史」を開催して、近世部会委員に江戸時代の府中宿について史料を読み解きながら講演していただきました。講演会の詳細については、5ページに紹介しています。

近・現代専門部会

近・現代部会では、「資料編」の目次、内容、掲載する史料について検討しています。現用の行政文書や郷土の森博物館所蔵の個人家文書の調査に取り組んでいます。また、ふるさと府中歴史館で保管する歴史的公文書については引き続き東京外国語大学文書館に委託して調査を実施しています。

民俗専門部会

市民のライフヒストリー調査の成果を報告書にまとめました。

自然専門部会

自然部会は、「通史編」とそれに先行して刊行する報告書の内容、項目などについて検討しました。部会3回開催。

調査では、市内の小学校に協力いただき、百葉箱に温湿度計を設置して通年の気象観測データの収集を行っています。その他にも、市内の高安寺・東郷寺など寺院の境内に保存された植物群落の植生調査や、四谷の自然樹林のなかの土壌堆積のようすを確認する調査などに取り組みました。



寺院境内の植生調査の様子

前号以降、次の皆様にご協力をいただきました。ありがとうございました。（五十音順・敬称略）

石川裕三、市川閲子、市川千秋、市川紀子、市川仁、大熊雅弘、金井登久子、金井洋、菊池敏夫、菊池とし子、菊地幹雄、小林尚子、鈴木邦夫、進藤礼治郎、曾根原理、長谷川達朗、森懂太郎
大國魂神社、善明寺、高安寺、光明院、東京外国語大学、東京農工大学、東郷寺、沼津市明治史料館、府中市史談会、町田市立自由民権資料館、公益財団法人府中文化振興財団

